

2020 年 1 月 31 日

2019 年度聖路加国際大学大学院修士論文

救急外来のタッチを用いた看護ケアの様相

The Essence of Nursing Care Using Touch in Emergency Units

18MN008

菊地 彩花

## 要 旨

【目的】救命を最優先とする救急外来において、看護の原点ともいわれるタッチがどのように用いられ、また、看護師にとってどのような意味を持つのかを質的に記述することである。

【方法】二次救急指定医療機関の救急外来専従看護師を対象に、研究協力者が担当する患者の救急外来入室から退出までの看護場面の観察と、半構造化インタビューを用いた質的記述的研究を行った。インタビューでは、タッチを行った場面、その場面でのタッチの意図と、タッチを行った際の患者の変化をどのように捉えているのかについて聴取した。逐語録作成後、観察データとインタビューデータが合致する部分を抽出したタッチの行為に関する分析と、看護師 5 名のインタビュー内容を総観した M-GTA による分析を行った。研究期間は 2019 年 10 月～11 月であった。本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会（承認番号：19-A026）と研究対象施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】研究協力者は合計 5 名の男女で、年齢は 20 代～40 代であった。分析の結果、3 つのカテゴリー（《患者の救命や治療に関連したタッチ》《患者の心身を支えることに関連したタッチ》《患者と看護師のつながりを築くことに関連したタッチ》）と 9 つのサブカテゴリーに分類され、[意識的なタッチ] と [研究者の助言で気づいたタッチ]（以下、[意識されないタッチ]）の 2 つのタイプが見出された。前者は《患者の救命や治療に関連したタッチ》が多く、後者は《患者と看護師のつながりを築くことに関連したタッチ》で見られる傾向にあった。タッチに連動する声かけも 4 タイプ見出された。M-GTA の分析では、4 のコアカテゴリー（【タッチまでの道のり】【限られた時間の中でヒトの命を守る】【患者を「その人」に戻す】【救急外来看護師としての意味を見出す】）、11 カテゴリー、31 の概念が抽出された。看護師は意識的にタッチすることの他に、患者への思いがタッチとなって表れることもあった。また、患者の命を守るためにタッチを意識しないこともあれば、症状を悪化させないためにタッチをしないという選択もしていた。救急外来の看護師のタッチは、まず、患者の命を守るために「頭痛の 60 歳代男性」といったミクロの視点で患者を看る。治療が開始され、生命の不安定さから脱すると「〇〇さん」というメゾの視点で「その人」を見つめるようになる。救急外来では完結しない治療を病棟や外来につなげながら、将来の救急外来受診の可能性までも見据えて、患者を「生活者」というマクロの視点で捉えるようになった。

【結論】救急外来のタッチは、[意識的なタッチ] と [意識されないタッチ] の 2 タイプがあり、患者の命を守るべく「ヒト」となった患者を、看護師のタッチによって人生背景を持った「その人」へと戻していくプロセスだと考えられた。